

シンポジウム ②

発達障害：自閉症をめぐって

座長：平岩幹男（埼玉県小児保健協会会長）

[シンポジウムプログラム]

- 自閉症とその周辺 平岩幹男（埼玉県小児保健協会会長）
- 自閉症療育としてのABA 藤坂龍司（NPO つみきの会代表・臨床心理士）
- 自閉症療育について…保護者の立場から 渡辺志津子（つみきの会エリアコーディネーター）
- 自閉症児と歯科診療 白川哲夫（日本大学教授）

自閉症は1943年のKannerの報告以来、約70年が経過した。自閉症は基本的には社会性、コミュニケーション、想像力の障害を抱えているとされるが、近年、量的にも質的にも変化が見られている。量的には自閉症を抱える子どもたちは国際的にも増加していることが指摘されており、30年前には数千人に1人と考えられていたが、現在では100～200人に1人と考えられている。当初は自閉症の多くは知的障害を伴うものと考えられてきたが、現在では自閉症では知的障害を伴わない高機能自閉症（従来のAsperger症候群）が少なくないことも明らかにされている。増加の原因については遺伝子、環境の影響など多くの検討がされているが、まだ明らかにはなっていない。

また、自閉症およびその類縁疾患は広汎性発達障害として位置づけられてきた。しかし自閉症ではその症状においても知的なレベルにおいてもさまざまであり、それらに連続性（スペクトラム）が見られることから、自閉症スペクトラム障害という呼称が国際的にも一般的になりつつある。

子どもたちの自閉症は、多くは幼児期初期の言葉の発達の遅れにより発見される。乳幼児健診や保育園などが発見の手がかりになることが多い。従来は言葉の発達の遅れは知的障害と考えられており、知的障害の大部分に対しては有効な治療法がないことから、言葉の発達の遅れを伴う自閉症に対しても、有効な治療の手立てがないとみなされて集団での知的障害に対する療育を受けることが多かった。しかし最近では、早期に個別の療育を行うことによって、子どもたちが言語能力を獲得する場合も少なくないことが明らかになってきた。シンポジウムでは、こうした療育方法を取り上げながら自閉症児の療育についての理解を深め、また自閉症を抱える子どもたちの歯科診療についても講演いただいた。

▶ Pick Up

自閉症児と歯科診療

自閉症児の歯科診療は、小児歯科を専門にしている歯科医師にとっても困難を伴いやすいことが知られています。それには自閉症という疾患の特性に加えて、歯科診療そのものの性質が大きく関係していると考えられます。歯や歯ぐきの治療は、熟練した歯科医師ならほぼ無痛に行うことが可能ですが、全身で最も敏感といってもいい口腔を触られたり、高い音や振動を発生する道具を口の中で操作されることが、理解力の乏しい低年齢児や自閉症児にとって不快な経験であることは確かです。さらに自閉症児の場合は、本人の拒否が強いまま治療を急ぎ過ぎると、治療後にパニック様の行動がみられたり、次の回から診療室に近づかなくなるなどして治療がさらに困難になるといったマイナス面が現れやすいことが分かっています。恐怖感を植えつけることなくスムーズに歯の治療を行うためにはどのようなアプローチが適切か、われわれが日常的に行っている行動調整法等についてお話をさせていただきます。（白川哲夫）